教職課程センター紀要　第６号　(31)-(35)ページ、二〇二一年一二月
Jour. Center Teacher Develop. Edu. Res., Daito Bunka Univ., No.6 (31)-(35), 2021

論文

近代美術館における書のコレクション形成―松井如流を例に

Formation of calligraphy collection in the modern museum – as an example MATSUI Joryu

髙橋　利郎
Toshiro TAKAHASHI

近代美術館、松井如流、博物館資料

近代美術館における書の収蔵

残念ながら、近現代の書を体系的に収蔵する美術館は多くない。とりわけ戦後の書は造形的な面における工夫を先鋭化させてきたことによって、絵画や彫刻、美術工芸などと横並びの造形芸術の一分野と認識されることが一般化している。日展に五科として書が設置され、日本芸術院には第一部美術に書が位置付けられていることなどがその好例と言えようか。こうした位置付けを背景にするのであれば、特に「近代」をその名に冠する美術館において、書も体系的に収蔵され、書を専門とする学芸員によって他の分野と同程度に展覧会が開催される体制がなければなるまい。

実在の近代美術館を例に示すことにしたい。

昭和二十八年に開館した東京国立近代美術館は、日本ではじめて設置された国立美術館である。おおむね、明治四十年以降に制作された作品を収蔵の対象としており、その名の示すとおり、わが国の近代美術館の中核を成す館と言って差し支えあるまい。平成三十年度末現在の「東京国立近代美術館概要データ集」によると、収蔵品の総数は一七，〇一五件、このうち、書に分類される作品を二十一件確認することができる［註1］。この二十一件のうち八点は、尾上柴舟や園田湖城ら昭和二十三年から二十六年までの日展で審査員を務めた人物の作品で、創立時に文部省から管理換えになったもの。それ以外の作品については作家から寄贈を受けたものである［註2］。この作品群を見る限り、館が主体的に書の作品を選んで意味を持ったコレクションを形成しようとしているようには理解されない。収蔵品の総数からすると、書作品はごく少数であり、これまで書を中心とする展覧会の実績がほとんどないことからも、東京国立近代美術館の書に対する関心は薄いものと推察できる［註3］。

同様に、東京国立近代美術館より早い昭和二十六年に日本で最初の公立近代美術館として開館した、神奈川県立近代美術館についても簡単に確認してみたい。収蔵品はおよそ一五，〇〇〇件、ホームページ上のコレクション検索には、洋画、日本画、彫刻、版画、写真、工芸の分類がある［註4］。書はその分類にも見られず、検索にもヒットしない。これもまた東京国立近代美術館と同様に、書を積極的な収集や展示の対象としていないものと考えられる。

日本の近代美術館を代表する二館の実状は、いわば「近代美術」の特質を表象す

るものでもあり、多くの近代美術館に共通するものでもある。つまり、書を積極的には展示や収集の対象とせず、加えて専門の学芸員の配置にも消極的であることが「近代美術館」の特徴のようにも見えるのである。

しかし一方で、「書と東洋の美術」を柱にして金子鷗亭の作品などを中心に取り扱う北海道立函館美術館、地域の書家の作品を集める千葉県立美術館や群馬県立近代美術館、近年、篆刻家、梅舒適の作品や所蔵資料を収蔵した兵庫県立美術館など、それぞれの地域性に応じた活動を展開する館もある。

本稿で対象にする松井如流（一九〇〇～一九八八）のおもな作品の大半は秋田県立近代美術館に収蔵されている。コレクションは一五〇点にもおよぶ大規模なもので、近代美術館における屈指の戦後の書のコレクションということができる。本稿では、このコレクション形成までの軌跡を追いながら、その性格の一端を明らかにしたい。さらに、近年成田山書道美術館に寄贈されたコレクションについても言及し、二件のコレクションの質の相違についても論じることにしたい。

如流の個展と作品集

如流のおもな作品は、現在、秋田県立近代美術館に所蔵されている。大半は平成六年に寄贈されたものだが、まずはこのコレクションの性格を明らかにするために、如流生前の展覧会と作品集について確認していくことにしたい。如流は昭和三十年代のなかごろから、作品集の刊行と個展の開催を繰り返している。これらには新作だけをまとめたものもあれば、旧作を取りまとめたものもある。これらの編集や企画を通して、如流自身が自らの作品を選択し、集成していく様子が垣間見られるのである。

如流の作品集のうち、はじめに刊行されたのは昭和三十六年の『水到渠成』（私家版）である。如流は還暦を迎え、この前年に「水到渠成」という作品で日展文部大臣賞を受賞している。この作品集には、直近十年の作品のなかから三十点を如流自身が選んで掲載した。如流にとって最初の自選優品作品集であり、「水到渠成」のほか、「平安」（昭和三十年）「蕭閒」（昭和三十六年）「虚心坦懐」（昭和三十四年）「心事数茎」（昭和三十六年）「韋応物石鼓歌」（昭和三十三年）「淵」（昭和三十六年）といった、後年、如流の代表的な作品として扱われる作品が収められている。

次に刊行されたのは昭和四十四年の『古稀記念松井如流作品展』図録。東京日本橋三越本店の画廊で開催された新作展の作品カタログである。デパート展であることに配慮してか、ここに掲載された二十五点はすべて新作で、東方書道会展や日展などで発表した大作は含んでいない。

さらに翌年、『松井如流作品集』（私家版）が刊行された。タトウ入りの無綴本で、昭和三十二年の「陸放翁詩」から四十五年の「龍虎」まで十点の作品が一枚ずつ台紙に貼り込まれている。先の『水到渠成』に続く自選優品集で、前述の作のほか「韋応物石鼓歌」（昭和三十三年）「水到渠成」（昭和三十五年）、「四言対句」（昭和三十六年）「永」（昭和三十七年）、日本芸術院賞を受賞した「杜少陵詩」、六曲半双に三字の大作「知魚楽」、前年の個展に出品した「仙」、「思無邪」（昭和四十四年）が年代順に収められている。『水到渠成』をもとに精選し、その後九年の制作のなかから代表的な作品を加えた格好である。

昭和四十七年には、四十五年版と同名の『松井如流作品集』（私家版）が刊行された。タイトルは同じだが、体裁も内容も全く別の書籍である。収録される三十五点は昭和四十七年の現代書道二十人展に出品された「脩省」から年代を遡る形で配列されている。昭和四十一年以降の作品が二十五点で、近作集としての性質が色濃く、早い時期の作品については四十五年版の十点のうち七点が重複する。作品画像とともに作品名と出品展覧会、出品年が付されているが、必ずしも連年開催される一定の展覧会の作品が選ばれているわけではない。こうした選択には、如流の意向が反映されているものと考えて良いだろう。「脩省」のほかにも「虹」「造」「彬」「沙上鷺」のように、これ以降もしばしば作品集などに採録される作品が選択されており、これまでの作品集に新たな優品が加えられた形である。

次に如流の作品がまとめられたのは、昭和五十二年の個展「喜寿記念松井如流書」展開催時である。この展覧会のカタログには三十五点の新作が収録されている。四十四年の個展と同様に、日本橋髙島屋で開催された個展であることから新作展としたのであろう。

さらに、昭和五十六年の「傘寿余韻松井如流小品書展」（銀座・ギャラリー四季）、五十七年の「松井如流新春書展」（銀座・日産アートサロン）も新作展だった。昭和五十四年六月十六日、如流は脳血栓に見舞われて右半身に大きな運動障害を負う。しかし、その後の懸命なリハビリによって、翌年には作品制作を再開するまでに快復した。制作に対する意欲も戻った五十六年四月には如流の再起を象徴することになる個展が開催されたのである。

五十六年の個展に出品されたのは二十点。五十七年は二十五点。自詠歌を揮毫し

たものが多く、書きぶりとともに心情の変化を見ることができる。この大患後の個展の出品作には独特の滋味があり、これより後に刊行されることになる作品集にも何点かが収録されることになる。

昭和五十八年十一月には『松井如流作品集成』が講談社から刊行された。作品八十六点を掲載するＢ４判変形の豪華本である。最も早いものは昭和五年の「臨漢西狭頌」、新作では五十八年の毎日書道展に出品した「奥」、展覧会出品作のほか、「金山万葉歌碑」、「川端康成全集」題字原稿、「書簡（大野石斎宛て）」まで包括しており、如流の六十年以上にわたる書家としての仕事を集大成した書籍である。冒頭の十六点はカラー、それ以降は印に朱を入れた二色刷りで、それぞれを制作年代順に配列する。キャプションには作品名や出品展覧会、法量などに加えて、この時点における所蔵者も記載されている。ここに如流の名が見えないことから、記載のない作品については如流自身が所蔵するものと考えられる。

戦前の作品十一点はこれ以前の作品集などには収録されてこなかったが、第一回東方書道会展に出品された「臨漢西狭頌」「杜甫北征詩」、同じく第二回の「臨張遷碑」という、如流にとっては記念的な受賞作などが収められている。如流は昭和二十年の終戦前に戦災に遭って自宅を焼失、直後に郷里、秋田県横手町の菩提寺、桃雲寺に疎開している。翌年には埼玉県所沢市の門弟、鈴木柳川宅に仮寓して昭和二十五年に東京都練馬区関町に新居を構えるまでここで過ごしている。激しく動く時代に如流も翻弄されたが、この間もこれらの作品を守り続けたことによって、晩年の作品集に掲載することができた。

一方で、戦後の作品には、ここまでに刊行された作品集などに掲載された作品の再録が目立つ。「平安」「陸放翁詩」「韋応物石鼓歌」「水到渠成」「心事数茎」「蕭閒」「永」「杜少陵詩」「噩」「古」「知魚楽」「小自在」「思無邪」「仙」「七十自述」「杜甫月夜」「龍虎」「沙上鷺」「彬」「造」「脩省」「舎北閑望」「楽天知命」「圓通」「歳八十」「どんぐりの実」、これらの作品は、昭和三十六年の『水到渠成』以来、度重なる作品集編集の過程において選択が繰り返され、如流の目に適ったものとして掲載されてきた。門下の鈴木桐華をはじめとする人びとに所蔵が移ったものもあるが、晩年に到るまでこれらの作品の所在を把握していたことがわかる。「あとがき」には如流自身が書家としての人生を回顧して詳細に履歴を述べていると同時に、この書籍の編集に鈴木桐華の全面的な協力があったことを記している。こうした周囲の人びとによる作品管理も奏功してこの作品集成が上梓できたと言えるだろう。

この書籍の刊行直前の十月には秋田で個展が開催されている。「松井如流作品集成出版記念松井如流新作展」である。ここには新作三十点が出品された。これは秋田市の秋田県農協ビルで開催されたものであることから、東京で開催された二展とは来場者がほとんど重ならないものと考えられる。これを契機にその出品作の多くが人手に渡ったものと考えられる。

秋田県立近代美術館への寄贈と歿後の展覧会

昭和五十八年の作品集成のなかで博物館が所蔵先として示されているのは一件、佐久市立近代美術館所蔵の「大道汎兮」である。さらにこのあと、五十二年の個展に出品された「舎北閑望」が秋田県に寄贈され、秋田県立博物館の所蔵となった。

昭和六十三年一月十六日に逝去した如流の最初の遺墨展は、秋田県書道連盟・秋田市書道会が主催した「松井如流先生遺墨展」である。平成二年九月に秋田市のアトリオン特別展示室で開催されたこの展覧会は、秋田県書道連盟展に併催されたもので、郷土出身の大家を顕彰する意味合いが強い。出品の四十二点は秋田県書道連盟の会員などが所蔵するもので、地域に所在する如流の作を色紙などの小品にいたるまで持ち寄って開催した展覧会である。ここに「舎北閑望」は秋田県立博物館蔵として出品された。

本格的な遺墨展が開催されたのは翌平成三年のことである。銀座・東京セントラル美術館で開催された「松井如流遺墨展」（主催／毎日新聞社・東京書道会）には七十一点が出品され、Ｂ４判の大型のカタログが刊行されている。七十一点のうち、昭和五十八年の作品集成刊行以後に制作された作品が四点、作品集成に掲載される作品は五十六点におよぶ。八割の作品が如流生前の作品集成と重複することから、如流の作品選択がその歿後の展覧会にも引き継がれているとみて差し支えあるまい。このときには、先の「大道汎兮」に加えて「思無邪」が佐久市立近代美術館に、「彬」が東京都美術館の所蔵になっている。

五十八年の作品集成編集のころから如流門下の代表を務めていたのが鈴木桐華である。桐華（一九二三～二〇〇七）は、如流が戦後身を寄せた鈴木柳川の実弟で、昭和十三年、十四歳のときに如流に入門した。このとき如流は三十八歳。桐華は戦後シベリアに抑留され、復員すると自宅に如流が仮寓していた。五十年にわたって如流の身近に過ごし、如流の歿後も遺墨展の開催などに尽力した。桐華が如流生前

の作品選択などにも深く関わっていたことによって、遺墨展にも如流の遺志が反映されることになったのである。

この展覧会を終えるとほどなく、如流の作品群の寄贈に関する動きが活発化した。

平成五年ころには如流の作品群を秋田県に寄贈することが内定し、長男洪によって取りまとめが進められた。しかし、この年、洪が急逝したことから、その事業は洪の妻、洋子に引き継がれた。そして平成六年、秋田県に作品が寄贈され、この年の四月に如流の出身地である横手市に開館したばかりの秋田県立近代美術館に収蔵されることになった。同時に、県立博物館所蔵の「舎北閑望」も近代美術館に移された。これを受けて、平成七年、秋田県立近代美術館で寄贈を記念する「悠久の美―松井如流遺作展」が開催された。この展覧会に際して、秋田県立近代美術館が所蔵する如流の全作品を収録した「秋田県立美術館所蔵・如流作品図録」も刊行されている。これに掲載される作品は一一一点。「序」には平成六年に松井家から寄贈された作品が一〇〇点と記されていることから、一部は「舎北閑望」と同様に別の形で受け入れたものや、松井家以外の関係者から寄贈されたものがあると思われる。この一一一点には、平成三年の遺墨展の出品作の大半が含まれており、さらに愛玩の文房具の一部や関係の資料も寄贈された。こうして、秋田県立近代美術館には松井如流に関する大きなコレクションが形成されたのである。このあとも補完的に作品などが寄贈され、コレクションの総数は一五〇点ほどにおよぶという[註5]。

秋田県立近代美術館でこのコレクションを担当したのは、学芸員の小笠原光である。県立博物館で「舎北閑望」の受け入れ担当をした時から如流の作品に関わり、二度にわたって如流の展覧会を手がけた。書を専門とする学芸員ではないが、松井洋子とともに詳細な年譜も作成しており、如流の作品と経歴を整理した役割は大きい。

生誕百年となる平成十二年には、このコレクションをもとにした展覧会が秋田県立近代美術館（同館主催「生誕一〇〇年記念松井如流展」）と上野の森美術館（毎日新聞社・秋田県立美術館・東京書道会・上野の森美術館主催「生誕一〇〇年記念松井如流書展」）で開催された。ここでも遺族の松井洋子、門下を代表する鈴木桐華、所蔵館の担当者である小笠原光、各氏が連携している。

さらに生誕一一〇年にあたる平成二十二年、第六十二回毎日書道展特別展示として「松井如流―書・学一如の生涯―」（毎日新聞社・毎日書道会）が国立新美術館で開催された。平成十九年に歿した鈴木桐華に代わって、大東文化大学で指導を受けて門下となった林竹聲が実行委員長を務めた。この企画では、平成三年の遺墨展以来、如流の作品解説や如流論を執筆してきた美術評論家の田宮文平（一九三七～二〇一九）も中心的な役割を担った。田宮は如流の師である吉田苞竹論も手がけていて、特に東方書道会やその周辺には強い関心を抱いていた。展覧会図録には田宮によって書家としての如流が、書道史研究の西林昭一によって書学者としての如流が、歌人の篠弘によって歌人としての如流がそれぞれ詳しく論じられている。また、座談会の様子も収録され、多様な如流の姿が浮き彫りにされている。秋田県立近代美術館所蔵作を中心とする如流の書作品のほか、如流が蒐集した拓本の一部、著述や自用印、来簡など、如流にまつわる作品や資料が総合的に展示された。

以上のように、秋田県立近代美術館所蔵の松井如流コレクションは、昭和三十年代後半からはじまる作品集の編集や展覧会開催にあたって、如流が繰り返し自選した作品をもとにしながら、長男洪夫妻、門下の書家鈴木桐華などによって取りまとめられたものである。夫妻や桐華は如流の遺志を尊重して寄贈作品の選定を行っており、歿後に形成されたコレクションであるにもかかわらず、如流の眼差しが色濃く反映された作品群ということができるだろう。

むすびにかえて―成田山書道美術館のコレクション

この稿を執筆しているのは令和三年八月、まもなく成田山書道美術館で「生誕一二〇年松井如流と蒐集の拓本」という展覧会を開催するために、種々の準備を進めている。この展覧会には如流の作品と資料九十三件、蒐集の拓本を一三一件出品する。これには如流の作品のほか、如流宛の来簡、原稿、手控えや履歴書や辞令など各種の書類などを含んでいる。平成二十六年から二十七年にかけて、作品は松井洋子、鈴木響泉両氏から、拓本や書簡・原稿類は松井家から成田山書道美術館に寄贈された。「金石聲」「脩省」「心事数茎」「蕭閒」「快哉」「寿寧」「どんぐりの実」のように平成三年や十二年の遺墨展に出品された作品に加え、これまで作品集などで紹介されてこなかったものも多い。大作については、出品後に額や屏風から剥がされたまま保管されていたものも多かった。寄贈の前後で改めて装丁した作品もあり、初出品の後、久しぶりの展観となる作品もある。

如流蒐集の拓本については、これまでも『書跡名品叢刊』（二玄社）や書道研究

誌『書品』などで一部が紹介され、生前から折に触れて特別展示に供されることもあった。しかし、その全体像が紹介されるのは、寄贈をきっかけとする今回の展観が初めてである。

響泉は桐華の長男の書家で如流にも師事して親しく交わった。如流が創設した朝聞書会の副理事長であり、父同様、如流の顕彰にも努めている。この寄贈においても、松井洋子とともに中心的な役割を担った。

如流の歿後二十五年以上を経て寄贈されたこのコレクションは、如流の遺志を強く反映しながら歿後まもなく形成された秋田県立近代美術館コレクションと比較するとやや作品が小ぶりで、晩年の作品に比重がある。各種の展覧会の出品作が主体であることは同様だが、相対的に日展出品作は少なく、受賞作はない。如流は定期的に開催される各種の展覧会に年間を通して出品を続けており、晩年が近づくにしたがって、各所から賛助出品の依頼も絶えなかった。歿後も関係の展覧会への遺墨出品が続いており、今回の寄贈作には近年までそうした展覧会に出品されていた作品が多い。拓本や書簡、各種書類と併せ見ると書をめぐる如流の人物像が見渡せるコレクションであり、代表作を数多く含む秋田県立近代美術館コレクションと補完し合うことで如流の仕事の総体を確認することができる。

本稿では扱わなかったが、ほかに、如流の作品の一部と蔵書が大東文化大学に、また、自用印が古河市立篆刻美術館に寄贈されている。如流の歿後、長期にわたって関係者が手を尽し、資料の収蔵先を得てこうした寄贈が実現した。

松井如流の作品を中心とする資料は、おもに遺族や門下による関係者の整理を経て各所に収蔵されるところとなった。博物館資料となったこれらのコレクションは、最終的に所蔵される博物館の状況を的確に把握しながら、作家を知る関係者が形成したものと言い得る。作家の意志と周囲の人びとの敬意や熱意が形作ったコレクションなのである。このような充実したコレクションを得て、所蔵館はこれをどう活かすか、常に思索を続けねばならない責務を負っている。

博物館は社会教育機関として博物館法に基づいて活動が展開されるが、その様態はまさに千差万別であり、そこを運営する人びとの専門性や視点によって館そのものの性格が変化する。冒頭、近代美術館における書の不遇を嘆く形になったが、これは「近代美術」が構造的に内包している問題でもある。このことに目を向け、「近代美術」の指し示すものを今一度検討し直すことによって、近現代の書の収蔵と活用が各地の近代美術館に新たな切り口をもたらすことになるのではないだろうか。松井如流コレクションはその先駆としての意義を示しているように思えるのである。

註

1　https://www.momat.go.jp/ge/data/　令和三年八月七日アクセス。

2　https://search.artmuseums.go.jp/　独立行政法人所蔵作品総合目録検索システム。令和三年八月七日アクセス。二一件の内訳は以下の通り。尾上柴舟・園田湖城・豊道春海（二件）・石井雙石・川村驥山・吉澤義則・辻本史邑・松本芳翠・手島右卿・井上有一・比田井南谷・柳頼雅（五件）・國井誠海・青山杉雨・篠田桃紅・小林斗盦。

3　昭和二九年に欧州巡回書展の帰国展が開催されて以来、書を中心とした展覧会は見当たらない。

4　http://www.moma.pref.kanagawa.jp/webmuseum/　神奈川県立近代美術館コレクション検索。令和三年八月八日アクセス。

5　座談会「松井如流―書・学一如の生涯―」中の小笠原光の発言による。「松井如流　書・学一如の生涯」展カタログ（毎日新聞社・毎日書道会、平成二十二年）所収。

追記　作品の寄贈や展覧会運営、本稿の執筆などにおいて関係の皆様に多大なご協力を賜りました。付記して御礼申上げます。本稿は性質上、すべて敬称を略しました。